

Self-esteem and anthropobic-tendency in adolescents

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000032

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連¹

東京都立大学 岡 田 努・永 井 徹²

Self-esteem and anthropobic-tendency in adolescents

Tsutomu Okada and Thoru Nagai (*Tokyo Metropolitan University, Meguro-ku, Tokyo 152*)

This study attempted to clarify the relationship between self-esteem and anthropobic-tendency in normal adolescents. Two questionnaires measuring self-esteem and anthropobic-tendency were administered to junior and senior high school students, and college students. The results show that for the junior high school and college students, self-esteem and anthropobic-tendency correlated negatively, while there was an uncorrelativeness for the senior high school students. During senior high school age, they tend to estimate themselves in terms of their own standards rather than others', which result in little correlations between self-esteem and anthropobic-tendency. The conflict between one's autistic tendency and interpersonal relations tends to lead to the anthropobic-tendency.

Key words : self-esteem, anthropobic-tendency, adolescence, standards, age-differences.

本研究は一般青年における自己評価と対人恐怖的心性の関連について、青年期心性との関連から検討するものである。自己に対する評価（自己評価）と対人恐怖の傾向との関連については、臨床的な指摘が多くなされている反面、実証的に両者の関係を考察した研究は従来殆どなされていない。よって本研究では、質問紙上に現れた自己評価及び対人恐怖の傾向について、中学・高校・大学生の各年代における特徴を比較検討する。

対人恐怖的心性と自己評価との関係については、臨床的研究からは幾つかの示唆的な報告がなされている。山下(1977)によれば、対人恐怖症者は自らの症状を“重大な欠点”としてとらえていると述べられており、三好(1970)においても、対人恐怖症者が現実の中で自尊心をもって他者と関われない点を指摘しており、いずれも自己評価と対人恐怖的心性の関連を強く示唆している。また実証的研究においても、井上(1981)が Janis & Field (1959)の自尊感情に関する尺度の因子分析から、自尊感情を構成する因子として“他者からの評価を気にする”“自己の価値観”“社会的場面における不安”“劣等感”を挙げているが、これらは、永井(1987)、永井・岡田(1987)が一般青年における対人恐怖的心性の特徴として挙げたものと極めて類似したものとなっている。すなわち、永井・岡田は対人恐怖的心性には、“対人状況における行動の諸特徴（集団にとけこめない、対人場面での恥づかしさ等）”“関係的自己意識（他者の評価や

視線が気になる）”“内省的自己意識（不安や劣等感が強い）”の3つの面が見られるとし、因子分析等の結果からこの妥当性を確認している。

以上のように、対人恐怖的心性は青年期における自己概念の再構成に当たって自尊感情あるいは自己評価と深く関わりをもつものであるといえる。よって本研究においては、対人恐怖的心性と自己評価との関係について、青年期の中心的世代である中学・高校・大学の各世代間について発達の考察を行うものである。

方 法

調査対象

東京都内の公立中学・公立高校・国公立大学生（主に東京近郊の様々な高校出身の学生からなる）男女 1146名について質問紙調査を行った。内訳は、中学生が男子218名、女子188名（1年生—3年生）、高校生が男子223名、女子245名（1年生—3年生）、大学生が男子211名、女子61名（1年生—2年生）である。実施時期は1987年1月から3月にかけてである。

尺 度

自己評価についての測定 Rosenberg (1965)の Self-Esteem Scale の邦訳版（山本・松井・山成, 1982）を用いる。本尺度は個人の全体的な自己評価の高さを測定する目的で作成されたもので、岡田(1987)において中学・高校・大学生における尺度の1次元性が確認されている。尺度は7件法10項目で、より得点の高い者程自己評価が高いとされ、理論上とりうる得点の範囲は0—60点である。

対人恐怖的心性についての測定 対人恐怖的心性の測

¹ 本研究を進めるにあたり御指導・御校閲下さいました東京都立大学人文学部教授詫摩武俊先生に深く感謝いたします。

² 現所属 聖セシリア女子短期大学幼児教育学科。

Table 1
自己評価尺度及び対人関係尺度得点の平均とSD()内及びその年代差

尺度/年代	中 学	高 校	大 学	年 代 差	
男 子	(n=218)	(n=223)	(n=211)	F	多重比較
自己評価	33.31 (9.86)	31.35 (8.33)	33.74 (9.60)	4.10**	高<中, 大
対人状況における行動の諸特徴	27.88 (17.52)	31.84 (16.08)	35.39 (17.67)	10.12**	中<高<大
関係的自己意識	29.37 (17.55)	35.15 (16.08)	35.99 (15.41)	10.27**	中<高, 大
内省的自己意識	31.38 (17.21)	36.68 (15.27)	35.21 (14.44)	6.69**	中<高, 大
女 子	(n=188)	(n=245)	(n=61)	F	多重比較
自己評価	29.88 (9.00)	29.56 (6.51)	32.30 (7.74)	3.13*	中, 高<大
対人状況における行動の諸特徴	25.56 (16.73)	30.95 (15.36)	33.31 (15.75)	8.40**	中<高, 大
関係的自己意識	31.55 (17.35)	35.34 (14.91)	38.12 (15.80)	5.04**	中<高, 大
内省的自己意識	35.14 (16.83)	40.74 (14.65)	38.16 (15.02)	6.88**	中, 大<高, 大

** $p < .01$, * $p < .05$.

Table 2
自己評価尺度と対人関係尺度各下位尺度との相関及び相関係数の年代差

尺度/年代	中 学	高 校	大 学	年 代 差
男 子	(n=218)	(n=223)	(n=211)	χ^2 (df=2)
対人状況における行動の諸特徴	-.53	-.13	-.51	28.86**
関係的自己意識	-.54	-.06	-.60	50.85**
内省的自己意識	-.56	-.17	-.67	46.91**
女 子	(n=188)	(n=245)	(n=61)	χ^2 (df=2)
対人状況における行動の諸特徴	-.53	-.25	-.38	11.75**
関係的自己意識	-.53	-.29	-.47	9.28**
内省的自己意識	-.62	-.34	-.69	20.09**

** $p < .01$, * $p < .05$.

Table 3
自己評価得点の上位・下位群における対人関係尺度各下位尺度の平均とSD()内

尺度/年代	中 学		高 校		大 学	
	HI	LW	HI	LW	HI	LW
男 子/n	60	60	61	59	69	54
対人状況における行動の諸特徴	16.13(15.67)**	37.92(16.94)	27.34(18.92)ns	30.61(18.74)	26.33(15.51)**	49.24(16.35)
関係的自己意識	16.70(14.04)**	39.57(17.51)	32.16(16.98)ns	33.44(19.22)	25.73(12.06)**	49.17(12.51)
内省的自己意識	18.55(15.46)**	41.68(17.27)	32.48(15.39)ns	36.76(19.81)	24.80(11.16)**	47.78(12.12)
女 子/n	61	54	84	71	23	16
対人状況における行動の諸特徴	13.90(11.45)**	36.50(16.33)	28.44(15.63)ns	33.92(16.16)	26.39(14.92)*	39.38(16.10)
関係的自己意識	20.08(12.76)**	43.98(16.50)	33.12(15.84)ns	38.03(15.51)	33.52(16.77)**	50.31(12.08)
内省的自己意識	22.54(12.78)**	48.28(13.27)	37.16(15.65)ns	45.89(14.28)	30.70(10.85)**	52.81(16.28)

** $p < .01$, * $p < .05$.

定に当たっては永井(1987), 永井・岡田(1987)の対人関係尺度7件法42項目を用いる。本尺度は一般健常者における対人恐怖的心性を測定する目的で作成されたもので, “対人状況における行動の諸特徴” “関係的自己意識” “内省的自己意識”のそれぞれ14項目からな

る3つの下位尺度から成り, その因子的妥当性が永井(1987), 永井・岡田(1987)において確認されている。各下位尺度ともより得点の高い者程対人恐怖的心性が高いとされ, 理論上とりうる得点の範囲は各下位尺度ごとに0-84点である。

結 果

各尺度の尺度得点の平均と標準偏差、及び男女別・各年代間での分散分析の結果を Table 1 に示す(なお、多重比較は Newman-Keuls の検定を用いた)。ここに見られるように、男女とも対人恐怖の傾向は年代とともに上昇しているが、自己評価については、男子では高校生が最も低く、女子では大学生において高くなっている。自己評価得点と対人関係尺度各下位尺度得点の相関を Table 2 に示す。この相関係数の大きさの年代差を比較するため、相関係数を z' 変換した上で χ^2 検定を行った。この結果 Table 2 に見られるように、高校生において有意に低い相関が見出された。

この結果をより明確にするため、自己評価得点の上位・下位各 25% の者についての、対人関係尺度各下位尺度得点の平均と標準偏差を Table 3 に示した。男女別、対人関係尺度各下位尺度別で自己評価得点の(上位・下位群)×(年代)での 2×3 の分散分析を行ったところ、次のようになった。すなわち“対人状況における行動の諸特徴”で男子 $F=12.57$ ($p < .01$: 上位群で中学<大学, 高校, 下位群で高校<中学<大学), 女子 $F=10.52$ ($p < .01$: 上位群で中学<大学, 高校, 下位群で有意差なし), “関係的自己意識”で男子 $F=19.76$ ($p < .01$: 上位群で中学<大学<高校, 下位群で高校<中学<大学), 女子では $F=13.02$ ($p < .01$: 上位群で中学<高校, 大学, 下位群で高校<中学, 大学), “内省的自己意識”では男子で $F=14.83$ ($p < .01$: 上位群で中学<大学<高校, 下位群で高校, 中学<中学, 大学), 女子では $F=12.71$ ($p < .01$: 上位群で中学<大学<高校, 下位群で有意差なし)であった。また自己評価得点上位・下位間の t 検定の結果 Table 3 に見られるように、高校生においてのみ、自己評価の上位群と下位群の間に、対人関係尺度得点の差はなく、両群が他の年代に比べ中間的な得点を得る形で近づいていることが見出される。

考 察

結果の章において見られたように、対人恐怖の心性は、年代が上昇するに伴って高くなる傾向がみられる。これは、年代の上昇に伴って自己に対する内省化が進み、その結果他者と共にいるとき自分に過敏になる傾向が著しくなると考えられる。自己評価については、男子では高校生期において低くなっており、一方女子では大学生期における自己評価が他に比べて高くなっており、青年期における発達の性差を示唆するものである。Simmons, Rosenberg, & Rosenberg (1973) は、青年期において自己評価が低下する傾向があるとしており、また加藤 (1977) も、高校生期においては自己批判的傾向が

高く自己受容性が低いとしており、男子に関する本研究の結果は、これらと従来の研究に合致するものといえよう。一方女子青年においては、女性として身体受容や性同一性の確立が、自己評価と深くかかわっていることが考えられ(松本・村上, 1985; 菅, 1984), こうした女性性について安定して受容できる, より後の年代ほど自己評価が高くなることが考えられる。ただし、大学生女子についての調査対象の数が小さいため、断定的な結論は言えない。

自己評価と対人恐怖の心性の関係については、中学生と大学生においては負の相関関係がみられ、従来の臨床的研究を支持するものであるといえよう。このことは、青年期における自己意識との関連から、次のように考えることができる。青年期においては、客体自己と主体自己の分化が大きくなり、その結果、自己覚醒 (Self-awareness) が高まることが指摘されている (Rosenberg, 1979)。自己覚醒が高まった状態において人は、現実の自己の状態に対する知覚が鋭敏になり、自己のもつ“適切さの基準 (standard)”, あるいは理想自己像との差が意識されるために、自己評価が低下し、これに伴う不快感から脱するため、基準に一致した行動をとるよう動機づけられるといわれている (Duval & Wicklund, 1972; 押見, 1986)。そして、他者から見られる自己に注意をより向けやすい、いわゆる公的自己意識の高い者ほど、他者の評価や社会的規範などの自己の外的要因を基準として重視する傾向がある (押見, 1986)。菅原・山本・松井 (1986) は自己意識特性の年齢の推移についての考察を行ったが、これによると青年期においては公的自己意識が他の年代に比べ極めて高くなるが見出されている。菅原 (1984) は公的自己意識と対人恐怖の傾向の間に高い相関があることを指摘しているが、青年期における自己評価との関係に関しては、次のように考えることができよう。すなわち、公的自己意識の高い青年期においては、外的な基準に自己を一致させることで自己評価を高く維持しようとする欲求が生じる反面、社会的規範に対する反抗や、他者から安定して受容されるような関係が確立されていない (村瀬, 1983) ことなどによって、自己評価を高めることが困難な状況におかれる。そして一般青年における対人恐怖の心性の特徴として、他者から見られる比較的肯定的な自己像に反して、現実の自己像が理想像に比べ不完全であるという意識の葛藤があげられる (木村, 1983) ように、青年期においては現実自己と理想自己のギャップをうめられないまま、すなわち低い自己評価のもとで対人恐怖の心性が生じやすくなると考えられるのである。

一方、高校生において、自己評価と対人恐怖の傾向との間に負の相関関係が見られなかったことは、青年期心性との関連において非常に示唆的な結果であると考えら

れる。これは、高校生期が大学受験等の激しい競争にさらされる時期であり、他者との良好な関係によっては自己を評価しにくくなるためと考えられる。またBlos (1962) が示唆するように、ごく一部の親友との関係を除いて対他者関係から引きこもる傾向を示す時期であることも関係しよう。すなわち、自己を評価するに際して、他者からの評価を基準 (standards) にして自己を評価する在り方よりも、自己の個人的属性によって評価する在り方を、この時期の青年はとりやすく、よって対他者関係における困難さ、特にあまり親しくない者との間での関係の困難を意味する対人恐怖の傾向が、自己評価との間に相関を持たなくなるのであろう。また大学生期においては、自我同一性達成に関連して対人関係における親密性が大きく関与してくる (近田, 1984) などのことから、自己に対する肯定的評価と対人関係が再び大きく関連するようになると考えられ、自己評価と対人恐怖の心性の相関がみられるようになるのであろう。

臨床的には、高校生期においてのみ自己評価と対人恐怖の心性の相関が見られなかったことは、この時期における対人不適応に対する治療に示唆的な意味を持つと考えられる。すなわち、一般に心理療法においては個人の自我の強さを高める自己評価を高めることで、不適応の改善をはかるが (菅, 1984)、この年代においては、そうしたこと以上に、対人関係そのものを改善すること、すなわち環境調整が大きな意味を持つ可能性がある。

なお、対人恐怖の心性のみならずその他の不適応の心性や親子関係、友人関係等他の変数と自己評価の関連も、残された重要な課題であると考えられる。

要 約

目的：青年期における自己評価と対人恐怖の心性の関係についての発達の差異を考察する。

方法：自己評価及び対人恐怖の考察性に関する質問紙調査を中学・高校・大学生男女1146名に対して実施する。

結果：中学生・大学生については自己評価の高さと対人恐怖の心性の間には負の相関関係が見られたが、高校生においては、高い相関関係は見られず、自己評価の高得点群では他の年代に比べより高い対人恐怖の心性がみられ、低得点群においてはより低い対人恐怖の心性が見出された。

結論：中学・大学生期においては、自己を評価する基準として他者からの評価を主に用いるのに対して、高校生期においては、他者との関係よりも自己自身に関心が向き、青年自身の特性に基づいて自己を評価する傾向が強いものと考えられる。

引用文献

Blos, P. 1962 *On adolescence: A psychoanalytic*

interpretation. New York: Free Press.

近田輝行 1984 自我同一性と親密性——後期青年期の同輩集団と自己確立をめぐる——立教大学心理学研究年報, 26, 36-46.

Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.

井上祥治 1981 自尊感情の測定 遠藤辰雄(編) *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版 Pp. 64-84.

Janis, I. L., & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press. Pp. 55-68.

加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No. 14

木村法子 1983 青年期における対人恐怖の心性について——自己像との関連から——心理臨床学研究, 1, 7-17.

松本真理子・村上英治 1985 女子青年の性同一性に関する研究——粹づけ面接法による接近の試み——心理臨床学研究, 2 (2), 32-43.

三好郁男 1970 対人恐怖について——うぬぼれの精神病理——精神医学, 12, 389-394.

村瀬孝雄 1983 青年の心理と対人恐怖 青年心理, 41, 673-682.

永井 徹 1987 対人恐怖の心性に関する心理学的研究 東京都立大学人文科学研究科博士論文 (未刊)

永井 徹・岡田 努 1987 対人恐怖の心性の構造に関する研究 日本心理学会第51回大会発表論文集, 534.

岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.

押見輝男 1986 自己意識 対人行動学研究会(編) 対人行動の心理学 誠信書房 Pp. 227-233.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.

Rosenberg, M. 1979 *Concerning the self*. New York: Basic.

Simmons, R. G., Rosenberg, F., & Rosenberg, M. 1973 Disturbance in the self-image at adolescence. *American Sociological Review*, 38, 553-568.

菅 佐和子 1984 心理療法場面から見た女子青年の Self-Esteem の問題について 心理臨床学研究, 2 (1), 25-37.

菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.

菅原 健介・山本 真理子・松井 豊 1986 Self-Consciousness の人口統計学的特徴 日本心理学会第50回大会発表論文集, 658.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

山下 格 1977 対人恐怖 金原出版

——1988. 3. 7. 受稿, 1989. 3. 11. 受理——